

## 『資本論』第一巻における 有用的効果について (2)

谷 川 宗 隆

### 目 次 序

- 〔一〕 社会的再生産過程の一般的条件としての運送費用
- 〔二〕 『資本論』第一巻における有用的効果
  - (1) 有用的効果の基本規定
  - (2) 有用的効果と「協業」
  - (3) 有用的効果と「アニュファクチュア」(以上前号)
  - (4) 有用的効果と「大工業」
  - (5) 総 括

### 〔二〕 『資本論』第一巻における有用的効果

#### (4) 有用的効果と「大工業」

有用的効果は機械制大工業において、原本 500, 513, 639 頁と三ヶ所使用されている。500頁は資本の生産物として、513頁は近代的技術学、自然科学の適用との関連で、639 頁は生産手段との関連で問題となっている。従って、考察の順序はマニュファクチュアの機械への移行としての 513 頁、そして成立した機械体系と有用的効果 639 頁、最後に 500 頁となる。それにしても課題は大きい。有用的効果の基本規定を検討する限りでのみ問題とする。

マニュファクチュアに独自の分業の原理、すなわち、生産過程の各諸段階への特殊化と孤立化、それに照応した部分作業、部分労働者は社会的分業にも貫徹する。

「作業内のマニユファクチュアの分業について云えることは、社会内の分業

についても云える。手工業およびマニユファクチュアが社会的生産の一般的基礎をなすかぎり、排他的な一生産部門への生産者の包摂——彼の就業の本源的多様性の破壊<sup>(304)</sup>——は必然的な発展契機である。<sup>(1)</sup>」

以下、必要な限りで、社会的生産過程と有用的効果との関連をみてみる。

註 304 が示すように、「本源的多様性」を持つ労働は、労働農民の労働形態である。労働農民の労働形態と有用的効果との関連でみれば、その労働様式は固定化されず、あれやこれやの形態で人間的労働力が支出される。彼の有用的効果はまさに多様である。

さて、単純商品生産＝流通——「家庭の副業をとまなう小農業と都市的手工業とをピヴォー——フリーエの言葉をかりれば——とする一社会」<sup>(2)</sup>——は社会的分業をその実存条件とする。「商品で表示される労働」は一面化する。「社会的分業は、彼の慾望を多面化ならしめると同じように、彼の労働を一面化する。<sup>(3)</sup>」すなわち、相互に独立して営まれる私的諸労働の有用的効果は、本源的な多様性を持ちながらも、他面、その一部に狹窄され、その内容からみれば高くなる。都市的手工業においては労働様式が固定化すらされる。とは云え、「自立する農民または手工業者はたとえ小規模にもせよ展開する知識・洞察および意志」<sup>(4)</sup>を持つ。又「同職組合組織は、そのもとでの職業の特殊化・孤立化・および完成はマニユファクチュア時代の物質的実存条件に属するとは云え、マニユファクチュア的分業を排除した。<sup>(5)</sup>」

「商品生産および商品流通は資本制の生産様式の一般的前提であるから、マニユファクチュア的分業は、すでに特定の発展度まで成熟した社会内分業を必要とする。<sup>(6)</sup>」

(1) Das Kapital-I. S. 511. 訳書 K-I. 773頁。

(2) Ebenda. S. 401. 同上書. 627頁。

(3) Ebenda. S. 111. 同上書. 223頁。

(4) Ebenda. S. 379. 同上書. 598頁。

(5) Ebenda. S. 377. 同上書. 595頁。

(6) Ebenda. S. 370. 同上書. 587頁。

労働力すらが商品となり、資本制的生産過程の独自の形態としての単純協業が出現する。これはマニファクチュア初期において、特殊的发展段階を形成しないが、ことに大農業において出現する。この場合、たとえ、独自の生産力を形成し、その内部において平均的労働が成立するとしても、労働形態は依然として労働農民のものである。他方、手工業において成立する小資本<sup>(7)</sup>——小親方——においても、協業は成立するが労働様式は不変である。然し、すでに考察した様に、これから発展するマニファクチュアでは異なる。

「単純協業は個々人の労働様式を大体において変化させないでおくが、マニファクチュアはそれを根本的に変革して、個別的労働力の根源を襲う。<sup>(8)</sup>」

部分労働者の有用的効果はより一層制限されるのみならず、労働力自身が自立性を失う。制限された有用的効果の故に、労働内容からみれば、その熟練は高まる。他方、それは、もともと、労働力が本来持っていた「本源的多様性」を破壊して獲得されたものである。

生産過程の特殊化、孤立化・労働の特殊化とそれに照応する用具の分化と特殊化、かかるマニファクチュア的分業は「社会的分業を發展させ、倍加させる。<sup>(9)</sup>」すなわち、社会的分業そのものが特殊化、自立化して深化・發展する。本源的多様性を持った労働、労働力は、今や、社会的生産過程において、破壊され、その有用的効果は商品として、特殊化、孤立化、自立化して發展する。

「この基礎上で各特殊の生産部門は、みずからに適應する技術的姿態を経験的に見出し、それを徐々に完成し、特定の成熟程度に達すると急速にそれを結晶させる。<sup>(10)</sup>」

マニファクチュアは手工業の技術を基礎とする。それ故、部分労働者が彼の有用的効果、目的を実現するために獲得している「法則としての彼の行動の

(7) 「小資本範疇について」安部隆一、(『経済学雑誌』第九卷、第四号、所収) 参照。

(8) Das Kapital-I. S. 378. 訳書 K-I. 597頁。

(9) Ebenda. S. 370. 同上書. 587頁。

(10) Ebenda. S. 511. 同上書. 773頁。

仕方様式<sup>(41)</sup>は、「特殊な作業が、経験的および専門的に極意をえたものでなければその奥義を極めることのできない秘伝<sup>(42)</sup>」として、主観的技術として、存在する。近代的技術はこれと全く対立する。まして、社会的生産過程としてみれば、自然発生的な社会的分業にもとづき、各特殊生産部門において、各特殊生産過程の全体労働者が生産する商品、すなわち全体労働者の一定の、各特殊の・有用的効果を生産するための「法則としての彼の仕方様式」は、ますます謎となる。大工業、すなわち近代的技術はかかるヴェールを引き裂いた。

「各生産過程を絶対的に・さしあたり人間の手をいっさい顧慮することなく、その構成諸要素に分解するという大工業の原理は、技術学という全く近代的な科学を創造した。社会的生産過程の錯雑した・外観的には無連絡で骨化した・諸姿態は、自然科学の意識的・計画的で所期の有用的効果に应じて組織的に特殊化された応用に分解された。<sup>(43)</sup>」

全く近代的な科学たる技術学、すなわち近代的技術が<sup>(44)</sup>、直接の対象とするのは「社会的生産過程の錯雑した・外観的には無連絡で骨化した・諸姿態」である。マニュファクチュアの独自の分業原理にもとづき、各特殊生産部門において、特殊の生産過程として、存在する生産過程そのものが対象となる。

さて近代的技術は、自然発生的に成立し、成熟し、骨化している各特殊生産

---

(11) Das Kapital-I. S. 186. 訳書. K-I. 330頁。

(12) Das Kapital-I. S. 511. 訳書. K-I. 774頁。

(13) Ebenda-I. S. 511—512. 訳書. K-I. 774頁。

(14) technisch, technologisch, Technik, Technologie については、『『価値論』研究』、第六論文『生産力』についての一考察』及び、第七論文『資本の有機的構成について』参照。又、近代的技術の本質については、“Wirtschaft und Technik, Friedrich von Gottl-Ottlilienfeld. (“Grundriss der Sozialökonomik, II. 1923. Tübingen.) S. 59—64. 参照。

産業における基礎研究と応用研究、すなわち Industrial Research と Development, 技術の側面としてみれば, Existing Technology-New Technical method-Development. 等については、安部隆一「研究所組織序論」（「経営組織と会社経営」（森山軋店刊）所収論文参照。

過程を客体として把握し、分解する。

「この場合には、総過程が客観的に・それ自体として・考察され、その構成的諸段階に分析されるのであって、各々の部分過程の遂行および種々の部分過程の結合の問題は、機械学・化学などの技術的应用によって解決される。<sup>(15)</sup>」

従って、「自然科学の意識的・計画的な、そして所期の有用的効果に応じて (je nach dem bezweckten Nutzeffekt) 組織的に特殊化された应用 (Anwendungen der Naturwissenschaft)」における有用的効果とは、各特殊生産部門における各特殊生産過程の各特殊有用的効果、すなわち全体労働者の有用的効果、及び、各特殊生産過程を構成する各特殊部分過程の有用的効果、すなわち部分労働者の各特殊有用的効果を指す。近代的技術はかく「生産過程をその構成諸段階に分解し、かくして与えられた諸問題を機械学・化学など、要するに自然科学の应用によって解決する。<sup>(16)</sup>」のであるが、各特殊生産過程・各特殊部分過程における特殊的技术課題を、一般的原理たる自然科学、すなわち、機械学・化学・物理学等々を基礎としての技術学的解明である。然し、技術学的解明たる「理論的概念はやはり、大規模な蓄積された實際的経験によって完全にされねばならぬ。<sup>(17)</sup>」第一巻、原本398頁、訳書第一部623頁の註、101が示すように、技術学的解明は更に実験と實際的経験を積み重ねて始めて、近代的技術へと生成する。近代的科学と技術は各特殊生産過程において、各特殊の有用的効果に応じて、近代的生産方法の手段としての、労働手段としての機械を発明し、発展させる。とは云え、近代的技術は労働手段の解明のみを対象とするのではない。

「技術学はまた、使用される用具のあらゆる多様性にも拘わらず人体のあらゆる生産行為が必然的にそのうちで行われる少数の大きな基本的運動形態を発見したのであって、それはあたかも、機械学は機械がどんなに複雑であっても

(15) Das Kapital-I. S. 397. 訳書 K-I. 622頁。

(16) Ebenda. S. 397. 同上. 622頁。

(17) Ebenda. S. 398. 同上. 633頁。

それが簡単な機械的力能の絶えざる反復であることを見誤らないのと同様である。<sup>(18)</sup>もし、技術学が機械学と同様に多様な生産行為を「小数の大きな基本的運動形態」に帰着せしめる原理を発見しておらねば、紡績機・力織機の発明は不可能であったであろう。何故ならば、第十三章「機械と大工業」註100（原本396頁、訳書621頁）にあるように、紡績及び機織りはマニファクチュア的分業の立場からすれば簡単どころか、むしろ複雑な手工業的労働であったから。

かくて、近代的科学と技術とはマニファクチュア時代の独自の機械たる「多数の部分労働者たちから結成された全体労働者そのもの」を対象とする。すなわち、各特殊生産過程・各特殊部分過程そのものを客体として分解する。それ故にこそ、又、各特殊の有用的効果に応じて分解されるとは、「如何にして、如何なる労働手段をもって、作られるか」が各特殊生産段階の技術的課題となる。

今、機械を主体としてみれば、「機械としては、労働手段は、自然諸力による人間力の置換え及び自然科学の意識的应用による経験的熟達の置換えを条件づける物質的実存様式を受けとる。」<sup>(19)</sup>発達した機械たる「機械体系において大工業は、労働者が既成の物質的生産条件として見出すまったく客体的な生産有機体を有する。」<sup>(20)</sup>かかる機械体系は、各特殊生産過程＝大工業において、各特殊有用的効果に応じて、機能する。労働者を主体としてみれば「労働手段とは労働者が自分と労働対象との間に差し入れてこの対象に対する彼の活動の伝導体として彼のために役立つような、一の物、または諸物の一複合体である。彼は諸物を、能力手段として他の諸物に——彼の目的に応じて——作用させるために、それらの物の力学的・物理学的・化学的な諸属性を利用する。」<sup>(21)</sup>

今や、次の一文における有用的効果が何を指すか明白である。

---

(18) Das Kapital-I. S. 512. 訳書. K-I. 774頁。

(19) Ebenda. S. 365. 訳書 K-I. 581頁。

(20), (21) Das Kapital-I. S. 404. 訳書. K-I. 630頁。

(22) Ebenda. S. 187. 訳書. K-I. 332頁。

「資本の増大するにつれて、充用された資本と消費された資本との差額が増大する。換言すれば、建物・機械・排水管・役畜・各種の装置・のような、長かれ短かれの期間にわたり、たえず反復される生産過程で全範囲に機能する——または一定の有用的効果をあげるために役だつ——諸労働手段の価値の分量および質料の分量は増大するのであるが、それらの労働手段は漸次的にのみ磨損するのであり、したがってそれらの価値を断片的にのみ失い、したがってまた断片的にのみ生産物に移譲するのである。<sup>(29)</sup>」

但し、初版と現行版とでは若干叙述の順序が異なっている。第二版でこの順序が変更されたものである。

初版原本595頁, die [stets ihrem ganzen Umfang nach,] während längerer oder kürzere Periode, in beständig wiederholten Produktionsprozessen, funktionieren, oder zur Erzielung bestimmter Nutzeffekte dienen,

現行版=第二版, die während längerer oder kürzerer Periode, in beständig wiederholten Produktionsprozessen, [ihrem ganzen Umfang nach funktionieren], oder zur Erzielung bestimmter Nutzeffekte dienen,

[ ] 内の一句が初版での stets を脱落させて、現行版の位置に置き替えられている。

この文の関係代名詞 die は die Wert-und Stoffmasse der Arbeitsmittel の die Produktionsmittel であるため、現行版の方が良い。

又, die..., ihrem ganzen Umfang nach funktionieren, oder zur Erzielung bestimmter Nutzeffekte dienen, という節は、次の一文における Nutzeffekt の解明に役立つ。

第11章「協業」原書, S. 339—340, 訳書546頁,

「労働様式が同等不変な場合でさえも、より多数の労働者を同時に使用することは、労働過程の対象的諸条件における革命を生ぜしめる。多数者がそこで

(29) Das Kapital-I. S. 638—639. 訳書, K-I. 945頁。

労働する建物、原料などの倉庫、多数者のために同時または交互に役立たず容器・用具・装置など、要するに生産手段の一部分は、いまや、労働過程において共同的に消費される。一方では、商品したがってまた交換価値は、その使用価値の利用がいかにか高められようとも決して高められない。……したがって、ひとまとめに集中された共同的な生産手段の価値は、総じて、その規模およびその有用的効果に比例しては増大しないのである。共同的に消費される生産手段は個々の生産物に対しより僅かの価値成分しか交付しない、というわけは、一つには、それが交付する総価値が同時により多量の生産物のうえに配分されるからであり、また一つには、その生産手段は、個別化された生産手段に較べれば、なるほど絶対的にはより大きい価値をもってではあるが、しかし——その作用範囲のことを考えれば——相対的にはより小さい価値をもって生産過程に入りこむからである。」

前提としている生産力の段階は異なるが、問題としている生産手段の生産物への価値交付は全く同じであり、かつ又、いづれも、資本蓄積の視角から問題となっている。表現も前者は肯定文で、後者は否定文で、今問題たる有用的効果が使用されているだけである。

原本：638—9, (A) es wächst die Wert-und Stoffmasse der Arbeitsmittel..., die...ihrem ganzen Umfang nach funktionieren, oder zur Erzielung bestimmter Nutzeffekt dienen, während sie nur allmählich verschleissen, daher ihren Wert nur stückweise verlieren, also auch nur stückweise auf das Produkt übertragen.

原本329—340(B), so wächst überhaupt der Wertmassenweise konzentrierter und gemeinsamer Produktionsmittel nicht verhältnismäßig mit ihrem Umfang und ihrem Nutzeffekt. Gemeinsam vernutzte Produktionsmittel geben geringen Wertbestandteil an das einzelne Produkt ab,...

B文はA文に還元しうる。B文における mit ihrem (=die Produktionsmittel) Umfang und ihrem Nutzeffekt をより詳しく説明すれば、A文の die Produk-



tionsmittel die ihrem ganzen Umfang nach funktionieren, oder zur Erzielung bestimmter Nutzeffekt dien, となる。

従って、A・B文における Nutzeffekt は、各特殊生産過程において、生産物形成要素として機能している生産手段が作用した結果たる生産物を指している。A・B文とも生産手段が主体として分析されているが、各特殊生産過程の労働過程としてみれば、労働者が生産物形成要素として機能している生産手段でもって、労働対象に作用せしめ、企図する所の生産物が有用的効果として把握される。かかる有用的効果が、生産手段を主体として分析され、かつ、生産手段価値の生産物交付が問題となっている為、客体として把握されているのがB文である。A文はより詳しく、*energia* において叙述している。先に検討した説、有用的効果を有用的労働の作用そのもの、あるいは Dienst とする説の立場からすれば、B文の有用的効果は後半文の *ihrem Wirkungskreis* 「生産手段の作用範囲」そのものとなる。この点もう少し検討しよう。とは云え、この課題は基本的概念たる「生産力」に関連するため大きい課題である。従って、今問題たる有用的効果の基本規定を考察するに必要な限りでのみ問題とする。又、Dienst それ自体を問題とするのではない。これ又、別稿を要する。ここでは、さしあたり、『資本論』第一巻におけるいわゆる“produktive” Dienst に限って関説する。

Dienst についての基本規定は、第三篇・第五章・第二節「価値増殖過程」・原書201頁、訳書351頁に与えられている。「役立ちとは、商品のであれ労働のであれ、ある使用価値の有用的な働き以外の何ものでもない。」Ein Dienst ist nichts als die nützliche Wirkung eines Gebrauchswerts, sei es der Ware, sei es der Arbeit.

Dienst とは現実的使用価値、物の *die nützliche Wirkung* そのものを指している。従って、物、使用価値と有用性、有用的効果の関連が問題となる。ところで註16は、『経済学批判』におけるJ・Bセイや、F・バステアに対する批判を参照することを指示している。それは次の一文である。「商品は使用価

値としては原因として作用する(wirkt)。たとえば小麦は食料として作用する。機械は一定の割合で労働にとってかわる。商品のこういう作用は(Diese Wirkung der Ware)——それによってのみ商品は使用価値であり消費の対象であるのだが——これを商品のサービス(ihr Dienst), 商品が使用価値としておこなうサービス(der Dienst, den sie (=ware) als Gebrauchswert leistet)とよぶことができる。ところが商品は、交換価値としては、つねに結果の見地からのみ観察される。このばあい<sup>64</sup>に問題とされるのは、商品がおこなうサービス(um den Dienst den sie (=Ware) leistet)ではなくて、商品が生産されるさいに商品そのものにたいしてなされたサービスである。(um den Dienst, ihr selbst geleistet worden ist in ihrer Produktion)だからたとえば、機械の交換価値は、その機械によっておきかえられる労働時間の分量によって定まるのではなくて、機械そのものに費した労働時間の分量、したがって同じ種類の新しい機械を生産するために必要な労働時間の分量、によって定まる。」(原文は谷川が入れる。)

前半文における「商品の作用」Diese Wirkung der Wareは、小麦が食料として消費=実現されること、あるいは「機械が一定の割合で労働にとってかわる」すなわち、機械が労働手段として、消費=実現されている事態を指している。ところで、ここでまず重要な点は、商品価値が問題となる場合、商品価値の担い手としての使用価値・物は、現実的使用価値としてではなく、可能的使用価値・物としてである。この点、ここでは当然のようであるが、対象の形態をとらぬ「生産物」を問題とする時、重要となる。更に、商品としての使用価値・物の有用な属性を問題とするにあたっても、可能的使用価値と現実的使用価値においてそれぞれ問題とし、かつ統一において把握する必要がある。更に、Dienstたる有用な労働の有用な作用そのもの、現実的使用価値の有用な作用そのものを無前提でとりあつかえば、役畜が役畜として有用な作用そのも

⑥4 Marx. Engels Werke 13. Dietz Verlag Berlin 1961. S. 24. 訳書「経済学批判」  
宮川実氏訳、青木文庫版 41—42頁。

の、“Dienst.”を提供しているとなり、両者の本質的区別を如何に把握するかが問題となる。

商品価値としてみれば、機械はそれを生産するに必要な労働時間によって決まる。可能的使用価値・物としての機械が現実的使用価値として消費＝実現される場合、何よりもまず、使用価値・物としてであり、それに含まれる価値としてではない。

「ある労働材料、ある機械、ある生産手段がいかに有用であろうとも、もしそれが 150 ポンドたとえば五百労働日を要費するならば、それは、その役立ちによって形成される総生産物にたいして (dem Gesamtprodukt, zu dessen Bildung es dient,) 150ポンド以上附加することは決っていない。その価値は、それが生産手段としてはいつてゆく労働過程によってではなく、それが生産物として出てくる労働過程によって、規定されているのである。労働過程においては、それは、使用価値——有用的属性をもつ物——としてのみ役立つのであり、したがってまた、もしそれが過程にはいる以前に価値をもっていなかったとすれば、生産物には何の価値も交付しないであろう。」

すでに〔一〕において考察した如く、商品としての物・使用価値は、可能的使用価値・物としてまずあらゆる諸属性の一全体であり、従って様々な有用な諸属性の一全体である。それ故、物は様々な利用されうる。この位置は重要である。所で、可能的使用価値がその消費＝実現において現実的使用価値に転化するが、有用性はまさにここにおいて決定的に重要である。すなわち、物が生産手段として役立つ場合、「使用価値として、有用な属性を持つ物として、」—als Gebrauchswert, als Ding mit nützlichen Eigenschaften.—消費＝実現される。とは云え、有用な属性そのものが宙に浮いているのではない。現実的使用価値として有用な状態にあるとは、有用な属性を持つ物それ自体が刻々と消費＝実現され、かつ、有用性そのものを発揮しているのである。有用な属性は

②⑤ 『『価値論』研究』(前出) 174—5 頁参照。

②⑥ Das Kapital-I. S. 214. 訳書 K-I. 370頁。

物と一歩たりとも離れ得ず、物そのものが有用な属性を持つ物として機能している。

さて、生産手段は生産物形成要として消費＝実現される。従って、生産手段として役立つ諸使用価値、諸物は無目的に消費＝実現されるのではない。如何なる有用な属性を持つ物として消費＝実現されるかは、まさに、労働過程の一定の有用的効果に従ってである。

「商品で表示される労働の二重性格」の一側面としての「合目的的有用的労働」とはまさに動物とは異なり、所期の有用的効果にとって合目的であるか否かであり、かつ所期の有用的効果にとって、生産手段たる諸物を、有用な属性を持つ物として消費＝実現しているか否かである。まさに「人間的労働力の支出」の一形態であり、従って人間的労働である。もしかく把握しなければ、如何に役畜をも労働する、ひいては生産手段の "Dienst," が剰余価値を生産するという説を根本的に打破しうるのであろうか。かかる視角から、この一文の註22でいわゆる „service productifs” を批判している。

更に、現実的使用価値たる物、すなわち、物的発現している物・有用な属性を持つ物として物的発現している物を力説する根拠はかかる物的発現している物そのものが力・kraft でもあることにある。「人間そのものは、労働力の単なる定在として考察すれば、一の自然対象であり、一の物——たとえ生きた自己意識ある物だとしても——であって、労働そのものは労働力の物的発現である。」

「労働そのもの」は「商品で表示される労働の二重性格」をもつ。今、問題たるのはその一側面としての具体的有用的労働である。「労働そのもの」＝「労働力の物的発現」は勿論、その対象とする生産手段たる諸物を物的発現・有用な属性を持つ物としての物的発現せしめる。従って、可能的諸使用価値・諸物が今や、労働過程において合一し、一つの力として物的発現している。

②⑦ 「『価値論』研究」(前出) 第四論文「労働の人間の性格」参照。

②⑧ Das Kapital-I. S. 211. 訳書 K-I. 366頁。

「発現しえざる力は力ではない。むしろ力の発現の総体が力そのものである。力は運動において発現する。それは「諸力の遊戯」Spiel der Kräfte（ヘーゲル）としての過程 Prozess である。」<sup>(99)</sup>

さて労働過程として合一され、力—Kraft—として物的発現している「生産力」を、労働手段として物的発現している機械そのものを、価値増殖過程の立場からみてる。

機械は労働過程では常に全部的に入り込むが、価値増殖過程へは常に部分的にのみ入りこむ。したがって価値形成要素としての機械と生産物形成要素としての機械との間には大きな差額が生ずる。

「もし吾々が、機械と道具の両者からそれらの日々の平均費用……を引き去るならば、それらは、人間労働力の助力なしに現存する自然諸力とまったく同様に無償で作用する。機械の生産的作用範囲が道具のそれに較べて大きければ大きいほど、機械が無報酬で役だつ範囲が道具のそれに較べて大きいのである。大工業において初めて人間は、自分の過去の・すでに対象化された・労働の生産物を、自然力と同じく大規模に無償で作用させうるのである。」<sup>(100)</sup>

労働手段としての機械、有用な属性を持つ諸物の複合体としての機械・物的発現し、力として発現している機械・一つの力そのものが「機械の生産的作用範囲」die produktive Wirkungsumfang der Maschinerie として、力の規模として把握されている。

かく、具体的有用的労働は労働手段としての一つの物・諸物の複合体を、「能力手段 (machtmittel) として他の諸物に——彼の目的に応じて——作用させるために、それらの物の力学的・物理学的・化学的な諸属性を利用する」(前出)。機械にあっては、物の諸属性の認識、それら諸属性の有用性の検証、従って物

(99) 「『価値論』研究」(前出)、第八論文「生産力と使用価値」303頁。

(100) Das Kapital-I. S. 406. 訳書 K-I. 633.

(101) なお、訳書では Maschinerie, Maschine が機械と訳されているが、「前者は「発達した機械」の意味に使われ、後者は要素としての機械に使われる。

の種々な使用の仕方の発見・物の現実の使用が、科学と技術に裏づけされて始めて機械・諸物を一つの自然諸力として利用される。従って、「大工業は尠大な自然諸力と自然科学とを生産過程に合体させ」、『生産力』とし、労働の生産性を異常に高める。なる程、科学は諸法則を発見し、「一たび発見されたならば一文の費用も要しない」とは云え、これらの法則を利用し機械を創造し、生産するには労働が必要である。したがって「機械の生産的作用」が生産物形成者として役立つとともに機械・物・そのものが消費され、かくて、その部分のみが生産物価値に移行する。かくて、「機械と道具との両者から、その日々の平均費用を引き去るならば、それらは人間的労働の助力なしに現存する自然諸力とまったく同様に無償で作用する。」(前出)まさに「大工業において初めて人間は、自分の過去の・すでに対象仕された・労働の生産物を、自然力と同じく (gleich einer Naturkraft) 無償で作用させうる。」(前出)まして、かかる無報酬で役だつ範囲」 der Umfang ihres unentgeltlichen Dienstes」(前出)は機械を生産する機械の「無報酬で役だつ範囲」が大となりかつ能力からみて、力・一つの自然力そのものが大となればなるほど、生産された機械は、その能力「機械の生産的範囲」に較べて、相対的にそれに投下された労働時間はより少くなる。生産物に「価値を交付することが少なければ少ないほど、機械は一そう生産的であり、また機械の役立 (ihr Dienst) はより一層自然諸力の役立ち (dem=Dienst der Naturkräfte) に近づくのである。ところが機械による機械の生産は、機械の価値を、機械の大きさ及び作用 (zu ihrer Ausdehnung und Wirkung) に比して減少させる。」

62) 『『価値論』研究』(前出) 68—69参照。

63) Das Kapital-I. S. 405. 訳書 K-I. 631。

64) Ebenda. S. 404. 同上書. 613頁。

65) Das Kapital-I. S. 408. 訳書 K-I. 635—6. 但し最後の Ihrer Ausdehnung und Wirkung の Wirkung を訳書は「効果」となっているが、Nutzeffekt との誤解をさけるため「作用」と訳した。

所で、かかる Kraft そのものは、生産物形成要素として作用するのであり、従って、かかる ”生産的サービス,, は販売不可能である。又、かかる力は具体的有用的労働が引き出した一つの力であり、具体的有用的労働の有用な作用そのものであるが、かかる力・Kraft・すなわち「produktive Dienst」を販売することは不可能である。つまり、有用的効果を Produktive Dienst あるいは有用的労働の有用な作用そのもの、労働力の物的発現そのものに置きかえても、問題は一步も進まぬ。又、原本 K—I, S. 638, 訳書 943 頁の註 60 において、リカードをも含めて、”produktive Dienst,, 説を徹底的に批判している。

本題に戻ろう。「すべての発達した機械 (Alle entwickelte Maschinerie) は本質的に発異なる三つの部分から成立つ、——発動機、伝力機構、最後に道具機または作業機がそれである。<sup>66)</sup>」発動機は全機構の動力として作用する。伝力機構は運動を規制し、必要なあいには運動の形態を転化させ、運動を道具機に配分し、かつ伝達する。<sup>67)</sup>「機構中のこの两部分は、道具機に運動をつたえ、道具機をして労働対象をとらえて合目的的に変化させるためにのみ、現存する。機械中のこの部分—道具機—こそは、十八世紀の産業革命の出発点である。<sup>68)</sup>」産業革命の出発点たる道具機は一定の有用的効果に応じて「労働対象をとらえて合目的に変化」せしめる。

今、「発達した機械」の立場からマニファクチュアを見れば、「マニファクチュア時代の独自の機械は、やはり、多数の部分労働たちから結成された全体労働者そのものである。<sup>69)</sup>」すなわち、「多数の部分労働者たちから結合された全体労働者そのもの」が原動機、伝力機構、道具機又は作業機からなる「発達した機械」である。全体労働者の構成要素たる部分労働者をみれば、部分労働者そのものが各特殊生産段階において一定の有用的効果を生産する原動機・伝力機構・道具機又は作業機である。すなわち「多くの手工業用具にあっては、単なる動力としての人間と本来的操従者たる労働者としての人間との区別が感

<sup>66), 67), 68)</sup> Das Kapital—I. S. 389—400. 訳書 K—I. 612—613 頁。

<sup>69)</sup> Ebenda. S. 365. 訳書 K—I. 581 頁。

性的にはっきりしている。たとえば紡車にあっては、足は起動力としてのみ作用するが、紡錘を操縦して絲を引いたり燃<sup>よ</sup>ったりする手は、本来的な紡績作業を行う<sup>(40)</sup>。」

すなわち、原動機は労働力そのものであり、原動機の用具として足が、伝力機構として身体そのものが、かつ、作業機たる「本来的な紡績作業を行う」手と労働用具が統一して存在し、かつかかる諸機構は自己自身が持つ一定の有用的効果——精神的な観念、企図する目的——に従って、自己自身が秘伝として知っている法則・仕方様式にもとずき、自己自身を一機構として運動せしめる。

分業にもとづく協業たるマニユファクチュアは、独自の分業原理にもとずき、協業を編成する。そのため、独自の、各特殊的な有用的効果に応じて、分解され、孤立化され、自立化した各特殊生産過程の要求にもとずき、それに、最も合目的な形態を持つ労働形態を要求し、したがって、独自の発達した労働力・すなわち、部分労働者たる一機構を要求する。「彼はある作業ではより多くの力を、他の作業ではより多くの熟練を、第三の作業ではより多くの精神的注意深さ等々を示さねばならぬ<sup>(41)</sup>。」

商品としての労働力の使用価値たる労働力・物はもともと「人間の身体すなわち生きた人的存在のうちに実存して、彼が何らかの種類の使用価値を生産するたびに運用する、肉体的および精神的な諸能力の総計<sup>(42)</sup>」として実存する。

「マニユファクチュアは、都市手工業と農村家内工業との広汎な基礎のうえに、経済的作品としてそびえ立<sup>(43)</sup>った。」それ故、マニユファクチュアがその存立の基礎とする労働農民は「本源的多様性を持つ」労働形態で存在する。しかし、かかる労働形態がマニユファクチュアが要求する「ほんらい一面的な特殊機能にしか適さない労働力に発展<sup>(44)</sup>」するためには少くとも「7年間の徒弟期

(40) Das Kapital-I. S. 391. 訳書 K-I. 614—5頁。

(41) Ebenda. S. 366. 訳書 K-I. 581頁。

(42) Ebenda. S. 175. 訳書 K-I. 315頁。

(43) Ebenda. S. 387. 訳書 K-I. 609頁。

(44) Das Kapital-I. S. 366. 訳書 K-I. 581頁。



間を規定した徒弟法がマニファクチュア時代の終りまで有効であつた。<sup>(45)</sup>かくて、部分労働者は彼が本来的に持つところの精神的、肉体的諸能力のうち、「一面的な特殊機能」にのみ適するべく、「本源的多様性」を破壊して、彼自身の秀でた属性に応じて、特殊的・独自の労働力として発展する。

今や、マニファクチュア独自の機械が成立する。「全体労働者はいまや、巧妙さの高度を等しくする凡ゆる生産的属性を具えると同時に、特殊的労働者または労働者群において個別化された彼のすべての器官を専らその独自の機能に用いることにより、上の生産的属性を最も経済的に支出する。部分労働者の一面性はもちろん不完全性さえもが、全体労働者の手足としての彼の完全性となる。一面的機能の習慣は彼をその機能の自然的に確実に作用する器官に転化させるのであり、全体機構の関連は彼を強制して機械の一部分のごとき規則正しさをもって作用させるのである。」<sup>(46)</sup>産業革命は、マニファクチュアの特殊的一機構、部分労働者の道具機たる本来的な手の作業を襲う。「本来的な道具が人間の手から一機構に移されると、単なる道具の代りに機械が現われる。<sup>(47)</sup>」これは「適当な運動を伝達されるとそれに属する道具をもって、かつては労働者が類似の道具をもって行つたのと同じ作業を行うような、一機構である。」<sup>(48)</sup>今や、人間の器官・手・の直接的な延長としての労働用具が、対象化された労働たる死んだ一機構の労働用具となる。従つて、かかる労働用具は人間器官の制限から解放される。「産業革命の出発点たる機械は、一個の道具を使用する労働者に置換えるに、多数の同一または同種の道具を一度に操縦しつつ単一の動力——その形態をとわない——によって運転される一機構をもってする。これは機械 (die Maschine) ではあるが、やゝ機械的生産の簡単な要素としての機械である。」<sup>(49)</sup>

(45) Das Kapital-I. S. 386. 訳書 K-I. 608頁。「『価値論』研究」(前出)、213頁及び214頁参照。

(46) Das Kapital-I. S. 366. 訳書 K-I. 581—2頁。

(47), (48) Ebenda. S. 396—1. 訳書 K-I. 613—14頁。

(49) Ebenda. S. 392. 訳書 K-I. 616頁。

部分労働者の熟練は機械に移る。他方、これに照応した新たな労働形態「眼で機械を監視したり手で機械の誤りを正す新たな労働」<sup>60)</sup>が出現する。

道具機の規模の増大、道具機が持つ道具数の増大は人間の諸制限から完全に解放された形態での強力な一機構たる原動機・伝力機構を要求し、かつ蒸気機関が出現する。今や、部分労働者の発動機たる労働力そのものと足、伝力機構たる身体そのものが、それぞれ、客体的な一機構にとってかわられる。作業機そのものの単純協業、種類を異にするが相互に補足しあう諸道具機の体系・機械体系が出現する。すなわち、近代的科学と技術の本質が貫徹する。生産の連続性・自動原理の実施。最後に、機械による機械の生産にいたっては「人間の手」そのものが機械にうつる。ここにおいて、機械制大工業の技術的基礎が確立される。

「機械体系において大工業は、労働者が既成の物質的生産条件として見出すまったく客体的な生産有機体を有する。……機械は、のちに述べる若干の例外はあるが、直接に社会化された、または共同的な、労働によってのみ機能する。かくして今や、労働過程の協業的性格が、労働手段そのものの本性によって命ぜられた技術的必然となる。」<sup>61)</sup>

大工業における全体労働者はマニファクチュアにおける独自の全体労働者と異なり、「直接的に社会化された、または共同的な・労働」という形態を受けとる。一方における技術的統一としての客体的な生産有機体、これを「自己の活動の伝導体」（前出）として使用するかかる全体労働者の有用的効果は、直接に社会的な、共同的な生産物である。とは云え、「商品で表示される労働の二重性格」の一側面としてのみである。従って、社会的総生産過程にも妥当するものではない。

大工業の労働過程の本質からして、生産の連続性、自動原理、更には有用的効果の確実性を持つが、価値増殖過程の立場からすればより一層かかる原理は

60) Das Kapital-I. S. 391. 訳書 K-I. 615頁。

61) Ebenda. S. 404. 訳書 K-I. 630頁。

強化されて貫徹する。

「工場経営の——殊にそれが労働日の取締りをうける場合の——本質的条件は、結果の正常的確實性、すなわち、与えられた時間内に一定量の商品または所期の有目的効果を生産することである。」<sup>53)</sup>

大工業は、勿論、資本制的生産様式の一特殊生産様式である。大工業の技術的基礎たる機械体系は資本制的に充用される。一方では、大工業の機械体系は、不變資本の実存形態を受けとり、他方では、これに対立して、全体労働者は可変資本の実存形態である。従って、可変資本の実存形態たる全体労働者の共同的な社会的生産物は、資本の生産物としての商品・剰余価値を含んだ商品であり、これは資本に属する。すでに考察したように、単純協業において始まり、マニユファクチュアにおいて発展した「物質的生産過程の精神的諸力能を他人の所有として、また彼等を支配する力として、対立させる」<sup>54)</sup>という分離過程は「科学を自立的な生産力能として労働から分離して資本に奉仕させる大工業において完成する。」<sup>54)</sup>大工業独自の分業は次の様な労働形態で実存する。「分業が自動的工場内で再現する限りでは、それはさしあたり、特殊化された諸機械の間への労働者たちの配分、および、工場の種々の部門の間への諸労働者団——といっても、彼等は編成された諸群を形成してはいない——の配分であるが、そこでは彼等は、並列する同種の諸道具機について労働するのであり、つまり彼等の間では単純協業が行われるにすぎない。マニユファクチュアにおける編成された群は、主労働者と少数助手との関連に置換えられている。本質的区分は、現実には道具機に就かされている労働者（そのうえに、発動機の見張またはかまたを焚きをする若干の労働者が加わる）と、この機械労働者の単なる手伝（ほとんど専ら児童）との区分である。多かれ少かれすべての『フィーダー』（機械に労働材料を給するにすぎぬ者）はこの手伝に数えられる。これらの主

52) Das Kapital-I. S. 500. 訳書 K-I. 759頁。

53), 54) Ebenda. S. 379. 訳書 K-I. 599頁。なお、資本のフェティシズムスについては『価値論』研究」（前出）第二論文参照。

要部類のほか、技師・機械工・指物工などのような、全機械の統御およびその絶えざる修繕に従事している数的にはとるに足りない人員がいる。これは高級な——一部は科学的教養のある、一部は手工業的な——労働者部類であって、工場労働者の範囲外に属し、工場労働者に附属させられているにすぎない。この分業は純粹に技術的である。<sup>65)</sup>

独自の分業原理にもとづくマニュファクチュアと異なり、「直接に社会化された、または共同的な」労働形態で実存する全体労働者たる主要部類の労働者と、「全機械の統御およびその絶えざる修繕に従事している数的にはとるに足りない人員」との分業・「純粹に技術的」な分業として実存する。勿論、近代科学と技術が対象化された機械体系は資本に属する。かかる機械体系が要求する近代技術の担い手、及び熟練労働者、すなわち「高級な労働者部類」との対立において、全体労働者は単純協業の形態で存在する。かかる全体労働者を構成する部分労働者はもはや、マニュファクチュアにおける部分労働の如き熟練労働者ではない。「道具とともに、それを操縦するための巧妙さもまた労働者から機械に移る。」<sup>66)</sup>機械労働者は「眼で機械を監視したり手で機械の誤りを正す」(前出)新たな労働形態で実存する。資制的に充用される機械体系は、部分労働者として、かかる労働形態のみを要求するが故に、「機械の助手たちが遂行すべき諸労働の均等化または水準化の傾向が現われ、部分労働者たちの人為的に生み出された区別の代りに年令および性の自然的区別が主要なものとして現われる。」<sup>67)</sup>もともと、近代技術と科学が対象化された機械体系それ自体は、その運動、まして発展には、機械労働そのものに科学的教養ある、かつこれにもとづいた熟練技術の担い手たる労働者を要求する。然し、資本制的に充用される機械体系は、かかる労働を一部の労働者部類にのみ集約的に存在させ、これと分離して彼等の技術が未だ解決しておらぬが為に機械体系

<sup>65)</sup> Das Kapital-I. S. 441—2. 訳書 K-I. 681頁。

<sup>66)</sup> Ebenda. S. 441. 訳書 K-I. 680頁。

<sup>67)</sup> Ebenda. S. 441. 訳書 K-I. 681頁。

が要求する「機械の助手」としての労働のみを押しつける。従って、本源的には統一において存在する「精神労働と肉体労働」が分離され、対立において存在する。そのみではない。「労働過程であるばかりでなく同時に資本の増殖過程たる限りでのすべての資本制的生産にとっては、労働者が労働条件を使用するのではなく逆に労働条件が労働者を使用するという事が共通しているが、この顛倒は、機械をまっけて初めて技術的・感覚的な現実性を受けとる。労働手段は自動装置に転任することによって、労働過程そのものの間、労働者にたいし資本として、生きた労働力を支配し吸収する死んだ労働として、対応する。」労働者たちは生きた附屬物として死んだ生産機構に合体される。上述の制限された、分離された労働形態のみで、今や、機械体系に統制され、かつ又、労働させられる。労働時間としてみれば、かかる機械体系に押し込まれた形態で、必要労働時間のみならず剰余労働時間そのものの為に労働時間を延長する。労働からは解放されぬ。かくて「機械労働は神経系統を極度に疲れさすのであるが、他方ではそれは筋肉の多面的運動を抑圧し、また一切の自由な肉体的および精神的活動を不可能ならしめる。労働の軽減さえも責苦の手段となる、というわけは、機械は労働者を労働から解放するのではなく、彼の労働内容から解放するからである。」

今や、主要部類をなす生産的労働者・単純協業の形態で、機械体系の附屬物としてのみ存在する部分労働者の有用的効果は、極度に押し縮められる。すなわち、彼等が全体労働者の基本的要素としての部分労働者として、部分過程と全生産過程との関連を把握し、その上で、部分労働者として、労働手段としての機械を合目的的に運動せしめるのではない。「機械の統御」は一部の「高級な労働者部類」に属する。従って、全体労働者の有用的効果はかかる一部の「高級な労働者部類」が把握するものである。他方、主要部類をなす部分労働者は、かかる全体労働者としての有用的効果を把握するに必要な「全機械の統

59) Das Kapital-I. S. 444. 訳書 K-I. 685頁。

60) Ebenda. S. 444. 訳書 K-I. 684頁。

御」という機能から分離され、機械体系の附属物となり、彼等に敵対する機械の助手としての単なる労働力の支出としての労働形態に押し下げられる。とは云え、機械労働の「『熟練は六ヶ月の教育によって教授され、どんな農僕でも<sup>(60)</sup> 学びうるものである』」マニュファクチュアにおける年単位が月単位に短縮する。「本源的多様性」を持つ労働農民で、6ヶ月間、機械労働者としての熟練を得るに必要である。たとえ、動物と同様の労働形態、目的、仕方様式が押しつけられ、一定の労働様式のみを単なる労働力の支出としてなす労働形態であっても「人間にのみ属するような形態をとる労働<sup>(61)</sup>」である。つまり、与えられた目的のもとに自分の意志を従属させる。そのみならず「労働する諸器官の緊張のほかに注意力として発現する合目的的な意志が、労働の全期間にわたって必要なものであり、しかもそれは、労働がそれ自身の内容とその遂行の仕方様式とによって、労働者を惹きつけることが少なければ少ないほど、したがって、労働者が労働を彼自身の肉体的および精神的諸力の動きとして享樂することが少なければ少いほど、ますます必要なものである。<sup>(62)</sup>」

目的、仕方様式から疎外され、労働内容は少く、したがって、労働者を惹きつけることは少ない。かつ又、肉体的な運動そのものも、機械に属する物として機械的に運動する。かく、部分労働者が「労働の肉体的および精神的諸力の働きを享樂すること」が少ないだけに、逆に、ますます合目的的意思が必要となる。それ故「機械労働は神経系統を極度に疲れさせるのであるが、他方ではそれは筋肉の多面的運動を抑圧し、また一切の自由な肉体的および精神的活動を不可能ならしめる。」(前出)かくて、最大の生産力たる労働力そのものが破壊される。労働農民が持つ「本源的多様性」が破壊されるのみならず、労働力そのものが破壊される。

全体労働者の有用的効果を把握するには、更に、協業が企図する、目的とす

(60) Das Kapital-I. S. 445. 訳書 K-I. 685頁。

(61) Ebenda. S. 186. 訳書 K-I. 330頁。

(62) Ebenda. S. 186. 訳書 K-I. 330—1頁。

る計画・意志が必要である、これにもとづき、協業それ自体を効果的にならしめる為の、協業の本性から生ずる指揮・監督等の機能が必要である。「協業」・「マニユファクチュア」で考察した二重の独自の性格をもつかかる機能は、大工業において完成する。「労働手段の齊一な歩調への労働者の技術的隷属と男女両性および種々の年齢の個々人からなる労働体の独自の構成とは兵營の規律を生みだすのであって、この規律は発達して完全な工場体制となり、すでに以前に述べた監督労働を、つまり同時に手労働者と労働監督とへの一産業兵卒と産業下士とへの一労働者分割を、完全に発展させる。<sup>62)</sup>」

全体労働者の一定の有用的効果を把握するに必要な諸機能のうち、精神的・技術的機能は高級な部類に属する労働者に帰属し、協業一般に必要な精神的諸機能は監督労働者に帰属する。更に、いづれも、二重の独自の機能形態を持つが為め、手労働者、主要部類の労働者に敵対する。

#### (5) 総 括

かくて、我々は、有用的効果の基本規定にたち帰る。

「商品で表示される労働の二重性格」の一側面としての具体的有用的労働が目的とする・企図する生産物が有用的効果であるという基本規定は、単純商品生産＝流通、小資本、単純協業、マニユファクチュア、大工業、と各特殊生産様式のいづれにも貫徹する。

更に、有用的効果そのものは、各特殊生産様式において、それぞれ、独自の存在形態を持つ。有用的効果と合目的的有用的労働との関連も、各特殊生産様式において、それぞれ、独自の存在形態を持つ。

社会的総再生産過程との関連でみれば、上述の各生産力発展段階を通じての、労働農民が持つ「本源的多様性」——各種の、一定の有用的効果に応じて、あれや、これやの形態で人間的労働力の支出をなすという形態——の破壊過程であり、大工業にいたっては、労働力そのものの破壊にまで突き進む。これは

<sup>62)</sup> Das Kapital-I. S. 445. 訳書 K-I. 686頁。

他面、各特殊生産様式の段階に照応しての、社会的分業の発達として現われ、社会的にみれば、有用的効果の多様性が発達する。大工業にいたっては、生産力の発展にともない、まさに多様な使用価値・生産物が出現する。

本稿は生産的労働、その担い手としての生産的労働者の究明を課題としたのではない。それにしても、「生産的労働者の概念は、けっして活動と有用的効果との——労働者と労働生産物との——一関係を含むばかりでなく、労働者を資本の直接的増殖手段たらしめる独自の社会的な・歴史的に成立した・一関係をも含むのである。」（前出）

生産的労働の解明には、有用的効果を抜きにしては問題とし得ず、まして、有用的効果と合目的有用的労働との関連の分析をなさずには究明出来ない。

本稿では有用的効果そのものの基本規定を明らかにする点が主題であり、有用的効果と有用的労働との関連も、課題を明らかにするに必要な限りでのみ考察したにすぎない。

逆に、具体的有用的労働は、有用的効果との関連で問題とされる。従って、これは大きな課題である。とは云え、何らかの意味で具体的有用的労働を問題とする場合、有用的効果との関連を抜きにして問題とし得ぬことは確かである。もともと、有用的労働の基本規定は、有用的効果との関連で問題となるのであるから。

さて、我々の考察の結果だけでもってしても、有用的効果と有用的労働との関連で見れば第五篇・第十四章「絶対的および相対的剰余価値」の最初の一文は見事に要約している。

「労働過程が純粋に個人的な過程たるかぎりでは、同じ労働者が、のちに分離されるすべての機能を合一する。彼は自分の生活目的のためにする自然対象の個人的取得において自分自身を統制する。のちには彼が統制される。個々の人間は、彼自身の脳髓の統制下に彼自身の筋肉を活動させることなしには、自然に働きかけることはできない。自然体系において頭と手が組をなすのと同様に、労働過程は頭の労働と手の労働とを合一する。のちには、それらが分離し



て敵対的対立を生ずる。生産物は総じて、個人的生産者の直接的生産物から一の社会的生産物に、すなわち、一個の全体労働者の——すなわちその成員たちが近かれ遠かれ労働対象の取扱に関係のある一個の結合労働総員の——共同的生产物に、転化する。だから、労働過程そのものの協業的性格とともに、必然的に、生産的労働の、およびその担い手たる生産的労働者の・概念が拡大する。生産的に労働するためには、みづから手を下すことはもはや必要でない。全体労働者の器官となって、そのなんらかの細目機能を行えば充分である。さきに述べた生産的労働の本源的规定は、物質的生产そのものの本性から導き出されたものであって、全体として考察された全体労働者については依然として真である。だがそれは、個々にとり上げられた全体労働者の各成員については、もはも当てはまらない。<sup>(64)</sup>」

かかる変化は、単純な商品生産のみでは生じ得ない。労働力すらが商品となり、資本制的生产様式の各特殊資本制的生产様式の発展段に応じて成立・発展したものである。従って、「労働者を資本の直接的増殖手段たらしめる独自の社会的な・歴史的に成立した一生产関係をも含む。」(前出)

所で、資本制的生产・ことに直接的生産過程の立場からすれば、しかも、資本家の立場からすれば、剰余価値を生産、あるいは取得する場合のみ生産的労働である。とは云え、かかる視角で生産的労働を問題とする場合、無前提でとり扱われない。<sup>(65)</sup>

まして「物質的生产の領域外」を問題とする場合、なほ更である。『資本論』第二巻における有用的効果を問題とする場合にふれる予定である。

(64) Das Kapital-I. S. 533—4 訳書 K-I. 803—4頁。

(65) 拙稿、「保管費用の再生産=流通」(前出)「商業資本の〴〵可変資本〴〵について」参照。

(66) Das Kapital-I. S. 534. 訳書 K-I. 804頁。